

## はじめに

お母さん――。

この響きに、あなたはどんな思い出が浮かびますか。

お母さんの顔を知らない人もいるかもしれませんが、ちょっと想像してみてください。  
花にたとえるなら、どういう花でしょうか。

陽気なひまわり、清楚せいそな小菊、苦勞性の梅、気さくなタンポポ、それとも少しトゲがあっても美しいバラやアザミのようなイメージでしょうか。

華やかでなくてもいい。日陰に咲くスマレヤスイセンもいいし、月見草でもいい。  
どんな花もそれぞれ美しいように、お母さんにもそれぞれの個性と香りがあります。

また、花が風雨に耐えて生長し、下に芽吹く子供を見守るように、お母さんいろいろな苦しみに耐え、子供たちの未来に夢を託します。

今、幼児虐待<sup>きょうごたい</sup>、家庭内殺人事件などが毎日のように報道されています。でも、これはほんの一部であつて、ほとんどの親は家族を愛し、子供のためなら命を投げ出しても惜しくないと思つてゐるはずで。

その意味では、どんなに時代が流れても女性の道は本質的に変わらないし、変わつてはならないと思つてゐるのです。

戦前の風習では、家族のために犠牲になることが母親の美德とされ、戦後はその反動から自由のみが求められ家庭崩壊に見るように対立や確執<sup>かくしつ</sup>を招くこともありました。しかし、これからは一個の女性として己をみがき、家庭に、社会に自分を実現していく時代になると思います。

家族の犠牲となつて耐えるだけの生き方、自由に気ままに流されるだけの生き方ではなく、自分を大切にし、心を鍛<sup>きた</sup>え、充実した生き方が求められなければなりません。家族のために尽くすだけでなく、主体的、積極的に何かを学び、追求することに喜びを見いだす生き方。このような姿にふれることによって初めて、自立した子供が育つていくように思ふのです。

子供はお母さんの香りを食べながら成長していきます。お母さんの匂いは身の毛孔もうくから入ってくる心の栄養であり、世界平和の原動力ともいえます。

その可能性を秘めた母として、妻として、嫁として、姑として、そして一個の女性として、どうすれば香り高い生き方ができるのか。仏教的な視点に立って書き下ろしたのが本書です。

なお、ここには私の著書「こころの宅急便シリーズ」の中から抜粋し、これに加筆補正して用いたところもあります。ご参考に供することができれば幸いです。

母の匂い ● 目次

第一章 母として

ぬくもりは「菩薩行」

12

「生きる意味」をしつける

15

叱るより髪をなでる

20

ひっぱらないで

23

社会適合力

25

イッピンモノ

28

第二章 妻として

玉耶ぎんやのために説かれた「妻の座」

36

家事は女性のほうが適している

43

愚痴とため息は男の責任？

45

働く女性は強くあれ

50

笑顔の安心感

52

第三章 嫁として

好きなように、思いどおりに 56 「今」を考えるお年寄り 58

言葉に出そう感謝の気持ち 61 家も心も美しく 66

第四章 姑として

「開・示・悟・入」 70 道には幅がある 74

あの世に何をもっていく？ 77 「ブレ」や「二重写し」はありませんか？ 80

かわいいおばあちゃん 83

第五章 一個の女性として

いい男を吸い寄せる心の磁石 88 夢半分、現実半分 91

自立の道 95 女性の生きる喜びはどこにある 98

顔かたちではなく品格 104

第六章 商売繁盛

売るのは商品ではなく「真心」 110

お客さんを喜ばせる喜び 113

会社は部下を育てる場所 115

109

第七章 心の発見

女人成仏にょにんじよぶつ 120

「五行」ごぎょうの実践 124

幸福の基本は「無事」であること 127

119

おわりに

表紙カバー・グラビア絵 林ひさえ

第一章

母として



フリージア



ぬくもりは「菩薩行」  
ぼさつぎょう

おかあさん

なあに

おかあさんて いいにおい

せんたくしていた においでしょ

しゃぼんのあわの においでしょ

おかあさん

なあに

おかあさんて いいにおい

おりようりしていた においでしょ

たまごやきの においでしょ

(作詞・田中ナナ『おかあさん』)

この童謡はもう五十年前につくられたもので、今はあまり聞くこともありませんが、ほほ笑ましい親子のぬくもりが伝わってくるいい歌です。

お母さんは命を育む偉大な存在です。

「懐胎守護の恩」と経文に記されているように、妊娠するや、出産までの痛みを耐え抜きます。やがて赤ちゃんが生まれると、授乳やオムツの世話、できるだけ外出も控え、ほしいものも我慢して子供のことを優先します。

病気をしたときは寝ずの看病をすることもあり、入学するまでは、卒業するまでは、就職するまでは、結婚するまではと、マチ針を打つように節目を追い続け、犠牲を犠牲とは思わないのがお母さんの姿です。

太平洋戦争が終わる直前、アメリカの「東京大空襲」によって、約十万人の都民が犠牲になったことがあります。特に台東区、墨田区、江東区周辺の被害はひどく、見渡す限り焼け野原となりました。

その直後、「奉仕隊」というものが結成され、がれきの後片付けがはじまったとき、東京深川の一角に地面に横たわっているふたつの遺体がありました。それは赤ちゃん

をかばうように抱いたお母さんの姿でした。

よく見ると、赤ちゃんの下には穴が掘られたような跡がありました。迫る炎から我が子を守ろうと、必死になって固い大地を手で掘ったのでしよう。指の爪はほとんど失われていました。

そのおかげで赤ちゃんは火傷やけどひとつ負うことなく、小さな手でお母さんの乳房ちぶきをつかんで、眠るように亡くなっていました。

須田さんという若い奉仕隊員はその姿を見て涙を流し、手ぬぐいでお母さんの顔をきれいにしてあげました。花を捧げたいと思ったけれども回りは焼け野原。花などあるはずがありません。彼は「花があったらなあ」と泣きながらつぶやいたそうです。

先日も福岡市で飲酒運転の車に追突され、一家五人が乗った乗用車が海に転落し、幼い子供三人が亡くなるという痛ましい事故がありました。次第に沈んでいく車。お母さんは子供三人を助けるために四回潜り、後部座席の窓から助け出そうとしました。お父さんは体が大きいので窓から入れず、立ち泳ぎをしながらお母さんが連れ出す子供たちを抱きかかえました。

そこへたまたま通りかかった漁船が家族を引き揚げましたが、子供三人の死亡が確認されました。努力むなしくかわいい盛りの三人の子供を失ってしまった両親の気持ちはいかばかりでしょう。

自分の命に代え、我が子を助けようとする姿は大悲代受苦の菩薩ぼさつに近いものがあります。

たとえ暴言を吐かれたり、ののしられることがあっても、見捨てることはおろか、憎むこともできません。悲しいままでいとおしむ心は慈悲の極致というほかありません。

### 「生きる意味」をしつける

その反面で、いら立つこともないわけではありません。

「早くおいで！ 置いていくわよー！」

スーパーの駐車場で見かけた光景。二、三歳ほどの女の子がもみじのような手で目を押さえ、泣きじゃくりながらトボトボとやってきました。お母さんは車のドアを開くと、腕を組んでとげとげしい表情でにらみつけています。

確かに、育児は楽しい反面、「しつけ」にはかなりの心労をとまいません。聞き分けのない子、わがままを言う子に対しては、腹が立つこともあります。

しかし、荒立つ口調や表情、態度にふれて、どうしてもそんなに怒っているのか、子供は訳がわからないまま傷つくこともあります。自分は嫌われているのではないかと錯覚し、それが重なると、心を荒すさませていくことも少なくありません。

まず、親は「愛されているという実感」を子供に与えるべきです。この実感こそが安心感をもたらし、逆にこれがないと、いつも親にしがみつこうとします。そうすることで不安を除こうとしているのです。

にもかかわらず、今度は「甘えないで！」と突き放してしまう。こういう逆のことばかりやっているお母さんを時々見受けます。

愛する一方で、いら立つ心……。どうしてそうなってしまうのでしょうか。

それは、おそらく自分が子供のころにほめられたり、認めてもらったりした経験が少ないからではないでしょうか。

すべての人がそうではないとしても、叱られるばかりで、あたたかい愛情をかけられていなければ、どこかひねくれたり、あまのじゃくになったりするものです。自分の気持ちをわかってほしいという欲求が、我が子さえもやさしく受け入れさせないのです。

子供が何を求めているのか、なぜ喜び、なぜ泣くのか、それを正しく受け止めることができなくていい子育てはできません。

人の幸せを喜び、悲しみに思いを寄せる心は、もともと人間性の原点です。その感情をなくしたとき、人は自分を否定し、「生きる意味」を見失います。

しついで基本的に大切なことは、子供にこの生きる意味を感じさせることにあります。

生きる意味——。それは、この世に生まれてきてよかったという喜びに見いだすものです。

もし我が子が、「生きる希望がない」とふさぎ込んでいるならば、親としてこれほどつらいことはありません。我が子がいつリストカットするか不安におびえている親にとつては、自分を大切にして強く生きてもらうことだけが唯一の願いです。

生きる意味というものは人間関係の中で発見するものです。子供にとつて親は人間関係の原点ですから、まず親自身の感情表現が問題になります。

第一には、美しいものを素直に美しいと認める態度が大切です。

たとえば散歩をしているときにきれいな花を発見するとします。「ねえ、ほら見てごらん。きれいなねえ」と体全体で感動する。そうしたお母さんの姿に子供はやさしさや素直な心を育んでいくのです。

第二には、子供に接するときの態度です。

子供が人さまから何かをいただく。あるいは入学する。熱が下がる。こうした場合、あなたは親としてどういう表現をするでしょうか。

「よかったね」「おめでどう」「もうだいじょうぶ。学校に行けるよ」などという声はかけるとしても、その感謝や喜びが子供と共鳴できているかどうか。そこが非常に

大切なポイントになります。

親から体全体、同じ目線で喜んでもらえたら、子供は安心感や愛されている実感をもつでしょうが、実際はなかなかそのような確信を与えきれません。

たとえば下の子がテストで七十点を取る。この七十点は努力の上に勝ち取ったものとします。けれども上の子はいつも満点。こうなると親は物足りなく思うものです。喜んでもらおうと思って採点用紙を見せるのにわかつてもらえない。「どうせ私のことなんか…」と、ひがんだ気持ちになっていきます。

差別しているつもりはなくても、親にはどこか区別や比較をしていることがあり、子供はそれを敏感に読みとります。

成長してからでは遅いのです。幼児期においてたっぷり愛情を注がれると、身の毛もう孔を通して、人の悲しみや喜びに響き合う心が芽生えていきます。そしてやがてはそれが周囲の信頼を勝ち取ることになり、生きる意味を見いだすことにつながるのです。これを実践していくと、礼儀や思いやりというたぐいのものはおのずと身につくはずです。むしろ問題は、子供を愛する一方で変則的になりがちな親自身の心にあります。



## 叱るより髪をなでる

これから懺悔ざんげの意を込めて、ありのままを語ることにしましょう。

私には三人の娘がいます。長女は大学生、次女は高校三年生、三女は高校一年生ですが、三者三様とはよく言ったもので、同じお腹なかから生まれていながら性格はそれぞれです。

長女は思春期にありがちな反抗心も見られず、高校時代から努力家で、いつも机に向かつていました。

次女は勉強はあまり好き नाही ほうではありませんが、子供のころから活発な子で、自分がいっただん決めたことは絶対に譲ゆずらない勝ち気な気性を持っていました。

親からすると、それが一種の「わがまま」に映り、それを叱ると、彼女はいつもトイレの中に逃げ込みカギをかけました。トイレを緊急避難場所としていたようです。

将来のためにと勉強を勧めると、「私、青春をエンジョイするの」と目を輝かせ、「私のキャラクターを認めて」と口癖のように言います。

彼女は幼児期から、姉や妹だけがかわいがられているように思い込んでいたようです。私は彼女の言動をあまり認めませんでした。勝ち気な気性がわがままに映る一方で、それを良い方向へ導く知恵が足りず、感情的に叱ることで悪循環していったように思います。

三女は言われなくても自分で起き、食事も、勉強も計画的にします。これは親から口うるさく言われたくないからかもしれないかもしれません。昔の私は短気でしたから、今なおその幻影におびえ敬遠しているのかもしれない。

その犠牲になったのはいつも次女のほうでしたが、トイレの中での泣き声を聞いてから反省させられ、少々なことでは腹を立てないよう心がけました。叱ると隠し事をしたり、うそをついたりするようになります。それを恐れたのです。それ以来、三人とも明るく素直に育ってくれました。

一昨年の秋、アメリカのボストンで、牧師さんの奥さんと会う機会があり、子育てについて話を伺ったことがありました。

自分の子供のほかに六人の孤児を養子として引き取っているとのことでしたが、悪

いことをしたときは、ソファアに呼んで抱きしめ、髪をなでながら反省を促すということでした。

六人もの養子を迎えるという勇氣もさることながら、髪をなでながら教えるという心の広さには感心させられました。悪いことをとがめるとき、ふつう人は感情的になり、髪をなでるなどという気持ちなどは起こってきません。

確かに、子供にしてみれば、叱られるよりも髪をなでられながら教えてもらうほうがうれしいはずです。親に心配をかけてはいけないという気持ちも起こってきます。すべてのアメリカ人がそうではないでしょうが、概して日本人は、しつけは厳しくするものと思ひ込み、怒っているのか、叱っているのか自分でもわからなくなることもあります。

しかし一般的に、人は歳をとったら「かわいそうなことを言った」「もっとやさしくしてあげればよかった」など、後悔する気持ちが起こってくるものです。

その心の幅を若い人に求めるのは無理かもしれませんが、「今」という時間は、もう二度と帰ってきません。良い思い出にするためにもイライラしないで子育てを楽し

んでほしいものです。感情を制御する知恵を身につければ、子育てはきつと春の眠りのような心地よい思い出になるはずです。

今、三人の娘たちは将来の夢を描いています。私は現在、それぞれの個性に合わせた「枝づくり」の段階に入っています。

不必要な枝にだけハサミを入れるように、注意しておいたほうがよいと思われる点だけ、笑顔でアドバイスをするように心がけています。

## ひっぱらないで

「親」という字は「立ち木を見る」と書き、「家庭」という字は「家の庭」と書きま

す。家族それぞれに庭木と同じように独立した性分があります。

赤ちゃんのとき、個性の芽はまだ地中深く眠っている状態であり、それを見抜くことはできません。

けれども、だんだん成長するにつれて、それがわかるようになります。神経がこまやかだったり、どこか抜け目がなかったり、物おじをしたり、愛きょうがよかったり、おもしろい発想をしたり、きちょうめんであったり、ルーズなところがあったり、手先が器用か不器用か、くよくよする性格か、さばさばした性格か、個性を見抜けるようになります。

中学や高校ぐらいになると、文系タイプか理系タイプかも判断できるようになり、これらからほぼ将来の職種が浮かび上がってきます。

ただ、子供自身が自分の仕事について決定することは意外にも困難なようです。そこで親としては何かとアドバイスしてあげる必要がありますが、最終決断は子供自身に委ねるべきです。

親はアドバイスのつもりで話をするうちに、どこか押しつけた口調になりがちですが、アドバイスは「ひっぱる」というよりは「あとおし」程度のものでいいのです。

これは放任ということではありません。むしろ親の言うがままに動かず、自ら決断し、行動することこそ子供が自立する第一歩ではないでしょうか。